

「笹川杯作文コンクール2012」～中国語で応募～ 第5回（10月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の承諾を得ています。

野獣と鎖

広西省 鄭天華

獵師が小さい虎を拾ってペットとして育て上げたという話がある。虎はとても利口で、確かに一時期は飼い主に寄り添い楽しく過ごしていた。しかし、ある日、飼い主が手に付いた血の跡を舐めさせると、虎の野生が呼び起こされ、彼はその餌食となったという。

家畜を飼い慣らすことには少なくとも千年の歴史があるだろう。虎を囲い込んで飼育する例も少なくはないが、ついに普及はしなかった。費用も重要な要因ではあろうが、より重要な原因は恐らく別にある—災いを残す心配だ。千年以上も昔から、気を遣ってかわいがる者もあり、鞭や鎖で服従を強いる者もあった。飴と鞭を使い分ける方法もある。どういった手法を採るかに関わらず、ほぼ虎を手なずけ、大きな猫のように従順にすることさえできる。しかし、難しい所は、虎のような「大きい猫」の破壊力があまりにも強大なことで、逆襲はもとより、飼い主にじゃれついて揺さぶるだけでも、恐らく人間は生きた心地がしないだろう。もしも発狂したら、虎が自然と羊の群れに入るように—虎は依然として虎であるが、飼い主やその隣近所の人間は子羊になってしまうのだ。

しかし、結局それでも、虎をペットにする人はいる。比べてみると、鞭や鎖でしつけた方が放し飼いよりはずっと安全だ。鎖が鉄製で、監視している人間もいれば、鎖を引きちぎらない限り虎が暴れる機会はない。こうした状況でなら、虎が恐ろしいと言っても、どこも恐ろしくはない。怖いのは鎖のもろさと見張りの不注意だ。

話をしたいのは、原子力についてである。事実上、原子力は虎よりはるかに極端な例であり、私たち人類はそれをどうしても手なずけようとしている。しかし、十分に丈夫な鎖の備えはあるのだろうか。いつでも万全の注意を払って監視できるだろうか。

こんな話がある。ある夜、エジソンは夢を見た。夢の中で、彼の家の木製ドアノブが銅製に替えられていた。目覚めてみると、ノブが本当に銅製になっており、彼は正夢だったかと驚嘆した。家族によると、ノブは数日前に交換してあったのだという。発明家エジソンは優れた洞察力の持ち主だったが、自宅のドアノブに対しては「見ているようで見ていない」ことが実証されてしまったのだ。福島原子力発電所の設計者、建築者、管理者、保守担当者達は皆、長らく同じようなものを相手にしてきた。私は、決して彼らの責任感を疑う気はない。彼らには専門知識や洞察力もきっとあるのだろうと思うが、あまりにも見慣れすぎて「見ているようで見ていない」状態になる危険性はないだろうか。

日本という地震の多い国で、ある人が最高耐震度マグニチュード 7.9 という原子力発電所を建設した。原子力発電所の建設水準がここまでで限界だとしたら、あるいは地球上でマグニチュード 7.9 以上の地震が発生したことがなく、マグニチュード 7.9 以上の地震は世界最後の日を招くというのであれば、何も問題ではない。しかし残念なことに、実際、マグニチュード 9 の地震が発生した。地震災害の後、原子力発電所の漏出事故という災害がより深刻な事態をもたらしたのだ。

私が言いたいのは、虎につける鎖がどれほど重く丈夫であっても、ゆるむ可能性はあるということである。

パンドラの箱を開けた責任を追及するとすれば、それは誰になるのだろうか。アインシュタインか、オッペンハイマーか、それとも彼らを支えた巨人達か。しかし、いずれにせよ、67年前に、きのご雲は昇った。

広島と長崎の惨事は人々に痛みの記憶を残したが、「ビッグイワン」の炎上で世界を覆っていた恐怖は次第に忘れられていった。人はいつでも都合のいい言い訳を探している。原子力を利用したい時は、今度の技術は第三世代でもっと安全だ、今度の原発はもっと堅固だと言うだろう。原子力を放棄したくなったら、頭上にダモクレスの剣があるのだと繰り返し強調するだろう。

原子力は核兵器とは違うと言う人もいるが、残念なことに両者には共通点がある。比較してみると、法律、道徳、技術の鎖を設けてはいるが、原子力の巨大な威力の前には、その全ての鎖がこれだけ脆弱だということだ。映画の中の決まりきった展開と同じで、原子力を利用し得る全員に自身の本分を守らせ、心の歪んだ人を全て発射ボタンから遠ざけるようなことを永遠に保証する訳にはいかないし、誰もが原子力技術の専門家ではない。一人の情緒が極度に制御できなくなった時、社会が深刻に揺らいでいる時、原子力発電所が巨大な自然災害に直面した時、一国が存亡の危機に立たされた時、それでも全ての鎖が万全であると保証することはできない。

もしかすると、核分裂時代はもう古い話で杞憂なのかもしれない、原子力の次の段階は「制御可能な核融合反応」で、核融合の主な燃料である重水が地球の全部の水資源に含まれる量は 1/3200 にも達している。ネットで検索すると、重水は数十元、あるいは数百円で売られていることが簡単に分かる。この技術が成熟したら、人類はより丈夫な鎖を使って、この更に狂暴な野獣或いは家畜に向き合うはずだ。発電所を大気圏外に建設することすらできるかもしれない。しかし、その原料の獲得を阻止する方法はあるのだろうか。考えてみると、一人で地球人全員の運命を握るような人が数十、数百、数千、数万、さらに数十億となった時、その鎖を締めるにはどうしたらいいのだろうか。

これを無用な心配だと言う人は、欠点を隠し改めようとしぬ人だとも言える。

問題はすぐそこにある。実は誰でも知っているが、エネルギーの選択肢は何種類もある。ただ効率がまだ明らかになっていないだけだ。省エネルギーを選ぶこともできる。ただこれまでのように浪費ができなくなるだけだ。